地区の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40128

1. 地区の概要

西　本　陽　一

1. はじめに
2. 蛸島町の概要
3. 人口と世帯構成
4. おわりに

1. はじめに

金沢大学文化人類学研究室では、2013 年度の調査実習を珠洲市蛸島町の 14 町内を対象に実施した。本報告書はその実習調査に参加した学部学生および教員が、おもにその際に得た資料にもとづき、それぞれの関心を持ったテーマについて分担執筆した各章から構成されており、本研究室の調査実習報告書としては 29 冊目のものとなる[1)]。

蛸島町は現在、諏訪町、前の浜、中貝蔵、東貝蔵、島の地、仲町、本仲町、東仲町、仲脇、西脇、脇浜本町、東脇、今町、桜町、栄町、旭町の 17 町内から構成されている。このうち本調査実習の対象としたのは、桜町、栄町、旭町の 3 町内を除く 14 町内である。3 町内を調査対象から除いた理由のひとつは、学生と教員の 15 名の参加者による聞き取りの範囲としては、568 世帯 1495 名の人口をもつ蛸島町全体は大きすぎると考えられたことである。さらに、蛸島町の住民居住地域は蛸島港を中心として広がる部分と鉢ヶ崎の浜に沿って長く延びる新興住宅地からなるが、新興住宅部分には比較的最近に移入してきた住民たち多く、蛸島港周辺部の方が蛸島町の伝統的な特色をよく残していると思われたためである。しかし、「蛸島町」というひとつの町会でさまざまな年中活動をおこない、キリコと早船狂言で有名な秋祭りなどの行事をおこなうなど、まとまりとしては「蛸島町」という単位が一番強いことが調査を進めてゆくうちに分かってきた。したがって、3 町内の住民の方々を当初の聞き取り調査からは外したものの、鉢ヶ崎リゾート開発や街なみ環境整備事業などテーマによっては、当初の対象範囲にかかわらず、14 町内以外の住民の方々へも聞き取りをおこなった。

本実習調査は上に挙げた 14 町内を中心とした蛸島町を対象に、そこでの住民の生活の変化と現

況の把握を聞き取りと観察を通じておこなった。本書はその調査実習の成果報告書である。これまで同様に、2013 年 8 月後半に 1 週間かけておこなった本調査では、参加学生はとくに自分の調査テーマを決めず、地域の生活の総体について幅広く聞き取ってゆく方法を用いた。本調査の終わりの段階で各学生にそれぞれ関心をもったテーマをあげさせ、以後はそれぞれのテーマにもとづいた補充調査を学生各自が随時おこなった。本報告書はそうした学生各自の関心にもとづくテーマで構成されているため、全体として対象とした地区での調査内容を網羅するかたちにはなっていないことをお断りしておく。

本章の以下では、蛸島町の地理的景観や歴史背景等を概観する。

2. 蛸島町の概要

蛸島町は石川県珠洲市に属し、能登半島北東端に位置する漁業で有名な町である。現代では金沢市から蛸島へは、平成 25（2013）年 3 月 31 日より無料化された「のと里山海道」（旧「能登有料道路」を通って、約 2 時間半で行くことが出来る。また金沢市からは高速バスが毎日午前中出発の 4 本が出ている。金沢市内からこの高速バスに乗って約 3 時間で蛸島町に到着することができる。高速バス駅の最後の二駅である「弁天公園前」と「珠洲鉢ヶ崎」とが蛸島町地内の駅である。このふたつのバス停はいずれも蛸島町の中心を走る県道 28 号線沿いに立っている。

高速バスの弁天公園前停留所の向いには、いまも旧蛸島駅の駅舎が残っている。蛸島駅は、旧国鉄能登線の最終駅として昭和 39（1964）年に開業したが、自動車交通の発達などにより開業後まもなく乗客が減少し始めた。昭和 63（1988）年に能登線は第三セクターに移行されて「のと鉄道能登線」となったが、それも平成 17（2005）年に廃止になった。今も残る旧蛸島駅前には自動販売機が置かれ、鉄道記念品が売られている。いずれにせよ現在、蛸島町に行くには自動車かバスによることになる。

「蛸島」の名は「蛸島村」として江戸時代より存在する。明治 22（1889）年から昭和 29（1954）年のあいだ珠洲郡蛸島町であったが、昭和 29（1954）年の珠洲市成立とともに同市蛸島町となった。

蛸島町は、砂浜の割に海の深い地形の利をいかして、古くから漁港として栄えた。明治期には、地曳網、延縄漁、定置網などでイワシ、鯛、鱈、アラなど多くの収穫高を上げていた。大正七（1918）年には浜田久作氏が蛸島丸を建立し機船地引網による漁を始めた。昭和に入ると北海道へ出かけてのイカ釣り漁が始まる。昭和 20 年代には「巾着漁」とよばれる巻き網漁が盛んで、「巾着船」も多かった。しかし昭和 30 年代になると、漁獲が減少し漁業も規模縮小に向かった（永松　1977：20-21）。

2013年8月の本調査で住民の方々からお話を聞いたとき、イカ釣りが盛んだった時代には男たちは学校を出るとすぐに漁師になり、7ヶ月イカ釣りに行って300万円もの大金を稼ぎ、それで鉢ヶ崎近くの分譲住宅に一軒家を買ったという話を聞いた。当時は役所などの勤めの仕事は薄給だったために人気がなく、現在分譲住宅にある家の多くは、漁家の次男坊、三男坊が住んでいるシンタク（分家）だということだった。

漁業の他には農業が主な生業で「半農半漁」と表現されるが、漁業のために男が家を留守にすることが多かったため、妻が農業の担い手となり、「かあちゃん農業」と呼ばれた（『角川地名大辞典17　石川県』、永松　1977）。

他の生産品や産業としては、江戸時代から明治の終わり頃までは特産として素麺があり、「蛸島素麺」として各地に販売されていた。また江戸末期には4軒の酒造屋があったが、現在では桜田酒造一軒を残すのみである。江戸時代から、塩の専売制が施行された明治38（1905）年までは、鉢ヶ崎から脇浜にかけての浜辺において製塩業が盛んだった。一方で、明治31（1898）年頃からは蚕糸が盛んになり、副業として漁業に次ぐ生産高となった。大正7（1918）年春・夏・秋の蚕家は延べ346戸を数えた。珪藻土産業は昭和2（1927）年頃から開始され、鍵主工場など蛸島にも大きな工場があったが、昭和30年代の燃料革命によって衰退していった。昭和30（1955）年から開始された葉タバコ栽培は一時盛んだったが、15年後の昭和45（1970）年には半減した（『角川地名大辞典17　石川県』、永松　1977）。

現在の蛸島町は大きく4つの区域に分けて考えるとよいかも知れない。第一に海に面した西側の地域で、諏訪町、前の浜、中貝蔵、東貝蔵、島の地、仲町、本仲町、東仲町、仲脇、西脇、脇浜本町、東脇、今町町内から構成される部分である。第一区域には、古くからの蛸島住民が住む伝統的な家屋が、多数の細い路地を挟んで所狭しと建ち並ぶ、典型的な漁村の風景を見せている。

そこから東に向かって、浜辺沿いに並ぶ栄町、桜町、旭町町内からなる部分が第二の区域である。この区域は、昭和21（1946）年頃からだんだんと造成されてきた住宅地で、リゾート開発が進められている鉢ヶ崎を含む区域である。第二区域には、第一区域の住民の次男、三男たちが漁業で得た稼ぎで買った家が多いという。第二区域は、真っ直ぐに伸びる道路沿いに分譲住宅が建ち並んでいる整然とした構成を見せている。蛸島町の住民の住む地域は第一・第二区域であり、第三・第四区域には人は住んでいない。

第一の区域の内陸側には「上田坂台地」が広がるが、土壌が沖積土であるため、かつては土地のほとんどが水田として利用された。この第三区域の北側には「蛸島大池」がある。

鉢ヶ崎を含む第二区域より内陸側に位置する、水上神社とその周辺が第四区域である。古くは主に畑地として利用されてきたこの区域には、現在では各種の観光・スポーツ施設が建ち並んでいる。現在の蛸島町公民館もこの第四区域に建てられている。

蛸島町には光行寺（こうぎょうじ）と勝安寺（しょうあんじ）の二寺があり、どちらも真宗大谷派に属している。蛸島町各世帯の帰依寺院も、町外に帰依寺院をもつ世帯も多いが、大部分は真宗大谷派寺院である。

蛸島町には、高倉彦神社、事代主神社（エビス様）、若宮神社（コンピラ宮）、愛宕神社（ヒブセの神）、蛸島姫神社、水上神社（ムナカミ神社またはトトベトノサマ）の複数の神社がある。このうち水上神社は現在の公民館付近に位置するが、その他は山王の森と弁天島周辺の地域に集まっている（神主さん提供の資料による）。現在、常住の神主さんが 1 人いて神社の世話をしている。毎年 9 月 10、11 日に行なわれる高倉彦神社の秋祭りは、16 町内からキリコが出て大きな盛り上がりを見せる。また神社境内内の神楽殿で催される早船狂言は、平成 8（1996）年に石川県無形民俗文化財の指定を受けた。

3. 人口と世帯構成

表 1 は明治以降の蛸島の世帯数と人口の推移をまとめたものである。表では 1889 年から 1965 年までの長い期間の人口と世帯数変化の詳細が欠けているが、この間の日本全体の人口増加と同様に、蛸島の集落規模も増加している。1965 年以降を見ると、世帯数はほぼ同じ水準を今日まで維持しているが、人口については 1985 年以降に減少が大きくなる。2013 年の蛸島町の人口は 1985 年のそれのほぼ 3 分の 2 となっている。この間の人口減少は、1985 年と 1990 年の 5 年間に 15 パーセントの減少を示し、以降は 5 年間平均 6.6 パーセントの減少と、減少率が小さくなる。言いかえれば、日本経済のバブル期に大きく人口が減少し、バブル経済崩壊後の不況と低成長期に、より小さい減少率ながら確実に人口が減ってきている。これらの変化は主に若い世代が町を離れて他所に進学や就業の機会を求めていることによるものと推測されるが、一方で世帯数が比較的維持されているのは、高齢者の世帯が健在であること、珠洲市の中心街から通勤距離にあるなどいくつかの要因が考えられるだろう。この状況は、言いかえると、1 世帯あたりの成員数が減っているということであり、中でも高齢者のみによる世帯が増加していることでもある。

第 6 章でも見るとおり、蛸島町 14 町内の高齢化率（65 歳以上人口の割合）は 42.2%で、日本全体の高齢化率 23.3%の二倍近くであり、また能登北部の 39.3%よりもやや高い。蛸島町 14 町内の高齢者のうち、後期高齢者（75 歳以上人口、24.9%）は前期高齢者（65～74 歳、17.2%）よりも大きな比率を占めている。

表 2 と図 1 は蛸島町の調査対象の 14 町内の世帯類型をまとめたものであるが、高齢者だけからなる世帯（高齢者の単身世帯とどちらも高齢者の夫婦世帯を合せたもの）の割合は 39%を占めていることがわかる。つまり、蛸島町 14 町内の高齢者（42.2%）のほとんどは高齢者のみで生活し

ていることになる。世帯類型のなかで核家族世帯の割合も20%と比較的高い。図1には表れていないが、核家族に含まれる未婚の成員には40歳代の成員も多く見られる。

表1　珠洲市蛸島町の世帯数と人口の変化（上段：世帯数、下段：人口）

	1889	1911	1920	1953	1965	1970		1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2012	2013
	M22	M44	T09	S28	S40	S45		S50	S55	S60	H02	H07	H12	H17	H24	H25
蛸島	381	318	335	490	537	549	諏訪町	16	16	14	12	13	12	12	17	13
	1,736	1,844	1,811	2,748	2,455	2,378		60	58	57	39	37	33	37	40	34
							前ノ浜	44	37	37	34	32	35	41	50	35
								190	144	130	104	105	100	106	111	91
							中貝蔵	32	34	33	29	28	27	24	24	25
								138	141	124	99	92	96	82	70	75
							本貝蔵	62	60	60	62	62	57	54	49	53
								271	226	218	198	181	173	151	130	144
							東貝蔵	73	71	71	67	69	69	66	64	60
								321	280	284	221	219	207	183	180	172
							島ノ地	52	48	50	50	51	47	45	46	37
								213	188	187	164	144	130	117	125	92
							仲町	21	21	20	19	20	18	18	18	18
								94	81	78	67	59	56	49	38	41
							本仲町	22	26	22	21	21	20	19	19	31
								93	101	94	77	69	65	57	48	60
							東仲町	26	25	25	27	26	26	24	21	23
								107	104	102	97	77	77	73	57	54
							仲脇	30	26	25	25	22	23	21	20	28
								130	112	110	105	84	73	57	57	81
							西脇	19	24	19	22	20	18	17	18	21
								85	110	77	92	86	66	64	54	55
							脇浜本町	28	23	26	24	24	24	25	25	29
								134	107	110	94	90	79	76	68	75
							東脇	40	42	41	39	38	38	38	34	40
								189	176	174	132	128	119	106	84	103
							今町	32	34	35	32	35	33	34	32	34
								145	141	135	105	122	108	105	92	99
							桜町	19	20	20	18	17	11	9	8	10
								60	52	51	34	29	18	14	12	14
							栄町	64	73	72	67	72	70	66	67	72
								237	262	244	223	245	226	201	180	196
							旭町	-	32	37	35	34	39	40	41	39
								-	106	137	125	113	119	110	103	109
合計	381	318	335	490	537	549	世帯数計	580	612	607	583	584	567	553	553	568
	1,736	1,844	1,811	2,748	2,455	2,378	人口計	2,467	2,389	2,312	1,976	1,880	1,745	1,588	1,449	1,495

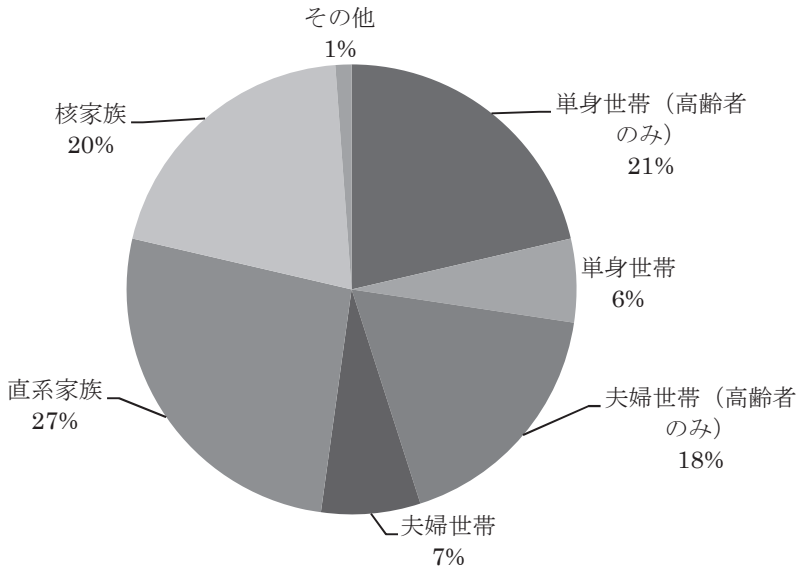
（出所：1889、1911、1920、1953年分は『角川日本地名大辞典17　石川県』（1981：547）、1965-2012年分は各年の『市町地区別人口及び世帯の概数』（石川県県民文化局）から作成。2013年分は2013年5月1日付の住民基本台帳より集計し作成。）

表2　蛸島町14町内の世帯類型

	諏訪町	前の浜	中貝蔵	本貝蔵	東貝蔵	島の地	仲町	本仲町	東仲町	仲脇	西脇	脇浜本町	東脇	今町	合計
単身(高齢者のみ)	3	7	6	18	12	5	3	3	4	7	4	4	9	8	93
単身	3	1	0	2	4	2	1	0	2	1	1	3	4	2	26
夫婦(高齢者のみ)	0	5	2	8	12	10	6	8	5	1	3	6	6	5	77
夫婦	0	2	3	1	3	3	2	0	3	6	3	1	3	1	31
直系家族	4	8	11	15	21	10	3	3	5	10	4	5	5	11	115
核家族	3	12	3	8	7	7	3	5	3	3	6	10	11	7	88
その他	0	0	0	1	1	0	0	0	1		0	0	2	0	5
合計	13	35	25	53	60	37	18	19	23	28	21	29	40	34	435

（出所：2013年5月1日づけ住民基本台帳より作成）

図1　蛸島町14町内の世帯類型



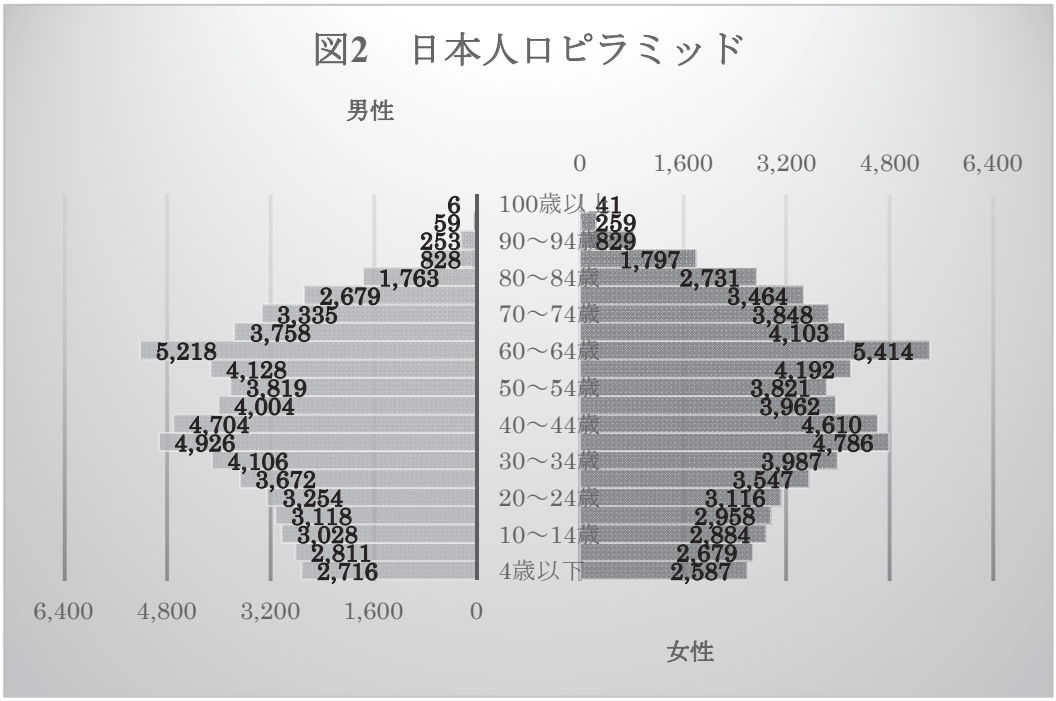


図2　日本人口ピラミッド
男性
女性
0
1,600
3,200
4,800
6,400
100歳以上
90～94歳
80～84歳
70～74歳
60～64歳
50～54歳
40～44歳
30～34歳
20～24歳
10～14歳
4歳以下
6
59
253
828
1,763
2,679
3,335
3,758
5,218
4,128
3,819
4,004
4,704
4,926
4,106
3,672
3,254
3,118
3,028
2,811
2,716
41
259
829
1,797
2,731
3,464
3,848
4,103
5,414
4,192
3,821
3,962
4,610
4,786
3,987
3,547
3,116
2,958
2,884
2,679
2,587

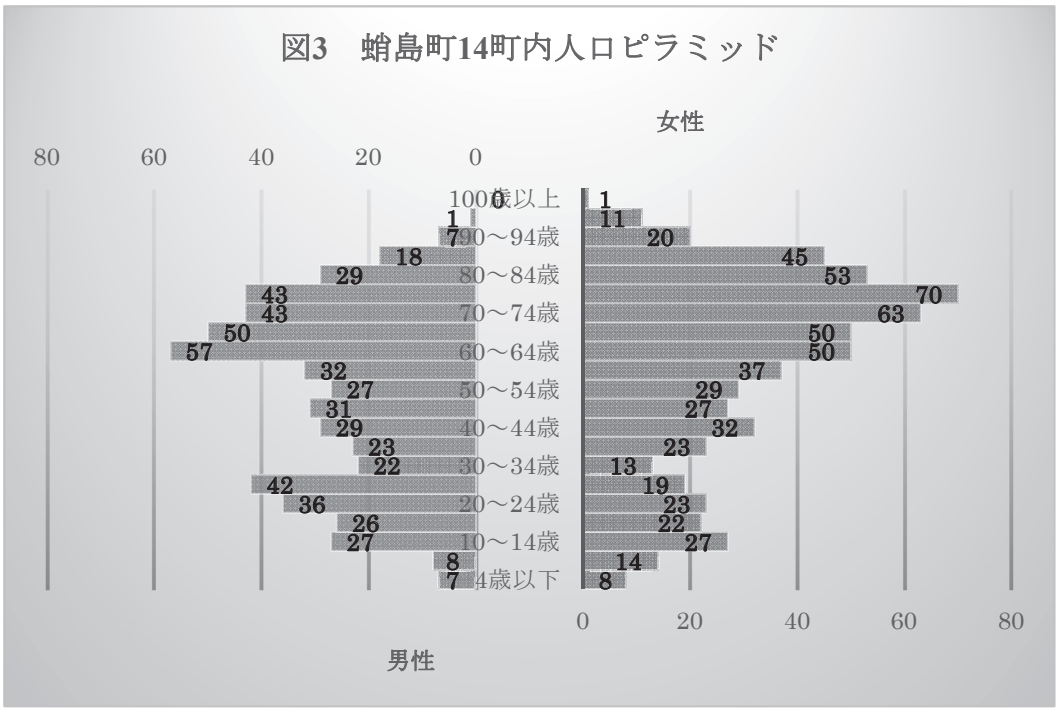


図3　蛸島町14町内人口ピラミッド
女性
男性
80
60
40
20
0
100歳以上
90～94歳
80～84歳
70～74歳
60～64歳
50～54歳
40～44歳
30～34歳
20～24歳
10～14歳
4歳以下
0
1
7
18
29
43
43
50
57
32
27
31
29
23
22
42
36
26
27
8
7
1
11
20
45
53
70
63
50
50
37
29
27
32
23
13
19
23
22
27
14
8

図2、3は日本全体と蛸島町14町内の男女別人口を5歳区切りで示した人口ピラミッドである。日本全体の人口ピラミッドは中心（30〜60歳代）のふくらんだほぼ左右対称の円柱を成している一方で、蛸島町14町内の人口ピラミッドは60〜70歳代が大きくふくらんでおり、そのふくらみも女性の方が大きい。つまり、蛸島町14町内の人口では高齢者の割合が高く、特に女性人口においてこの傾向が顕著である。反対に、日本全体の人口ピラミッドの中心である30〜50歳代人口部分において、蛸島町14町内の人口ピラミッドは大きくへこんでいる。日本全体の人口に比べて、蛸島町14町内の人口では生産年齢の人口が少ないことが分かる。さらに蛸島町14町内人口では、10歳未満の人口がとても少ないことが図3から分かる。まとめて言えば、蛸島町14町内では少子高齢化と生産年齢人口の少なさが顕著である。

4. おわりに

以上、蛸島町14町内について概観してきた。この地域に暮らす人々の暮らしに関わる固有のあり方については、以下に続く各章でさらに細かく見てゆくが、そのテーマは学生が興味をもった事柄を優先したため、この地域を語る際に重要な事柄がいくつか抜け落ちていることは述べるまでもない。

短い本調査期間とその後の散発的な補充調査で得られたデータは限られたものであり、お話をうかがう機会のなかった方も多い。なにより学生の実習ということで調べる側の未熟さも言うまでもなく、本報告書の記述にも分析にも不正確、不十分な点が多々あるものと自覚している。関係各位の忌憚ないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

なお本報告書で示される聞き取り対象者の年齢は、2013年4月1日時点の満年齢である。

注

[1] 既刊の調査実習報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」に掲げておいた。